



講評:ここは観光地でもなく景観地区でもない。しかしこの文化遺産はまぎれもなく大都市の開発最前線に思いついている。燈籠の町並みがすべてビルに建替わるとき、古くから海と暮らしてきたことを示す最後の生き証人をこの都市は失うことになる。著者の「愛着と尊敬」がただの思い出になるのはあまりに寂しい。
(審査委員 西山 徳明)

大貫 弘子
福岡市西区



私の好きな街並み

「あつ、今年も燕が来ている」と歩みを止める。町家造りの家並の続くこの町は昔唐津街道の宿場だった。

この町近くに住んで十数年、この街並みに年毎に愛着と尊敬が深まっている。

特別豪壮な家があるわけではない。むしろ町家特有の間口の狭い、古びた低い家並は、一見寂しくさえある。然

し、瓦葺根、白壁、よく磨かれた欄干に、この家々に住む人達の維持に費やす努力と費用を思う、間口に一年中殆どの家がメ細を飾っている。街には寺社が多く、地蔵堂や、小さな祠が、町に溶けこむ様に、ごく自然に道端に数多祀られていて、供花がいつも新しい。

盆には軒毎に門提灯が掲げられ、十三日には、提灯、線香を手にした長老を先頭に一家揃ってお寺迄御先祖様をお迎えに行く行列がこの道を行き交う。

そんな風景がびつたりとする街並みである。

これが天神から地下鉄で十三分の市の中に残っているのが、タイムスリップでもしたかのような不思議を感じさせる。

他の季節は早く店を開める花屋が、日暮れ迄開けている。毎年恒例である。

「また親燕が帰って来ないのよ」と店主が、ぼんやりと門口で待っている。店内の巨大な築に菓を作り、毎年子育てをしては、旅立って行く。

伊能忠敬が、一步一步歩いて計測した、この唐津街道。浜宿は、歴史と懐かしさを包んだ家並みを残して、私にとつては、癒しの場であり、大好きな街並みである。(現在は、西区野浜2丁目6丁目間で年毎にマンションや駐車場となっている町である。だが、福岡市では一番町家作りの家が残っている町である。一步、中をのぞけば巨大な築や大黒柱や、博多餅や、坪庭、階段重箱を抱えている町家が残る。この街並みは、宝物のようだと思っている。)

ベイサイドの夜景

「千と千尋の神隠し」が空前のヒットとなった年。主人は失業した。その間今までのあまりに忙しすぎた主人と私達家族はゆつくりした時間を過ごした。今まで行けなかつた家族旅行にも行った。そして一度見て大感激したかの映画も3回見に行った。求職中の主人を勇気付ける何かがあつたのだろうか。

そんな時ローソンのHPで「千と」のような風景募集というのがあつた。私が真っ先に思いついたのがベイサイドの「豊和」だつた。明時代を模した船はまるで八百万の神が乗ってくる神の船にも見えるし、マストは油屋の煙突のように聳え立つ。

早速乗船予定を立てて家族で乗りこむ。航路は福岡タワー、福岡ドーム、2つの光る観覧車と動く夜景を随時見せてくれた。福岡は本当に海辺が美しい町だ。最後に遠くに見えるベイサイドの明かりが近づく。その夜景は千尋が見ていた対岸の夜景そのものに見えた。

不思議の町に迷い込んだ千尋。そこでは働かなくては人間の姿でいられない。家族を助けることができぬ。

職をなくした主人。彼が迷い込んだ今まで仕事で知らなかつた昼の生活。そこは不思議な世界だつたかもしれない。家族を養うためにとあかく彼が見たこの映画は、きつと働くことの意味を問いただしてくれたのではないだろうか。

そして船から見たベイサイドの夜景は、新しい私達家族のライフスタイルの行きつく先に見えた。

千尋が見つめた海の果ての町。

そこには日常が待っているはずだつた。

ベイサイドに到着した日から一月後、主人は再就職を果たす。

私が撮影した写真はローソンのHPに掲載された。大切な我が家の通過点の記録として。



原田 光里
福岡市東区

講評:風景が人を勇気づける。アジアの極彩色に彩られた想像上の風景と現実とが物語を核にして合体し交錯する劇中劇的構成が兎事である。ドラマの結末とともに、「このような風景」感覚が世間に共有されていたのも驚びたい。
(審査委員 永崎 明子)

